

| | |
|------------------|---|
| Title | Erwin Panofsky's Early Netherlandish Painting : Its origins and character |
| Sub Title | |
| Author | 八代, 修次(Yashiro, Shuji) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1957 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.121- 127 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0121 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Erwin Panofsky's *Early Netherlandish Painting—Its Origins and Character—*

八代修次

“Early netherlandish painting” は一九五三年に Erwin Panofsky (The Charles Eliot Norton Lecture, 1947—1948) が Harvard University Press から出版した二冊の大著作が、第一巻の本文は三百五十八頁の主論文の外に一五〇頁に及ぶ詳細な註釋を伴つており、第二巻は第一巻末の圖版とは別に、四百九十六圖の本文に關係ある殆ど全ての圖版を収録してゐる。Panofsky は序文の中で、専門家のために新資料をのみかかべて論じてゐるよりも、「古都市の配置や地勢の概観を與へ、しかも一番重要な箇所を注目せしめるチャートローネのやうな役割を果

す」ことが目的であつたと書かれてゐる。そして又「その起原と特質」と云ふ副題が示すやうに、Hubert と Jan van Eyck を中心として彼等以前の畫家や寫本挿繪家から The Master of Flemalle や Roger van der Weyden 等の無題 “Primitives” と呼ばれてゐるネサールマンの十五世紀の畫家達を極めて重點的に扱つてゐる。この内容を目次に従つておぼくが、

- Introduction. The Polarization of European fifteenth century painting in Italy and the Lowlands
1. French and Franco-Flemish book illumination in the fourteenth century
 2. The early fifteenth century and the “international style”
 3. Sculpture and panel painting; about 1400; The problem of Burgundy
 4. The regional schools of the netherlands and their importance for the formation of the great masters
 5. Reality and symbol in early flemish painting: “spiritualia sub metaphoris corporalium”
 6. “ars nova”; The Master of Flemalle

7. Jan van Eyck

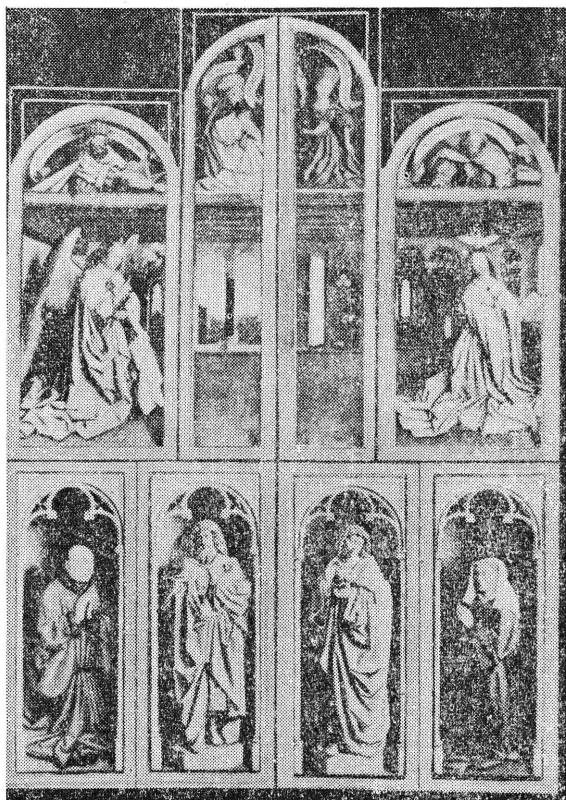
8. Hubert/or Jan van Eyck: The proplems of the Ghent altarpiece and the Turin-Milan Hours

9. Roger van der Weyden

Epilogue: The heritage of the founders
以上である。今これ等の各章にわたつて詳述
することを避け、美術史上最も興味あるガン
の大祭壇畫の作者についての Panofsky の綿
密な考察を紹介してみようと思う。

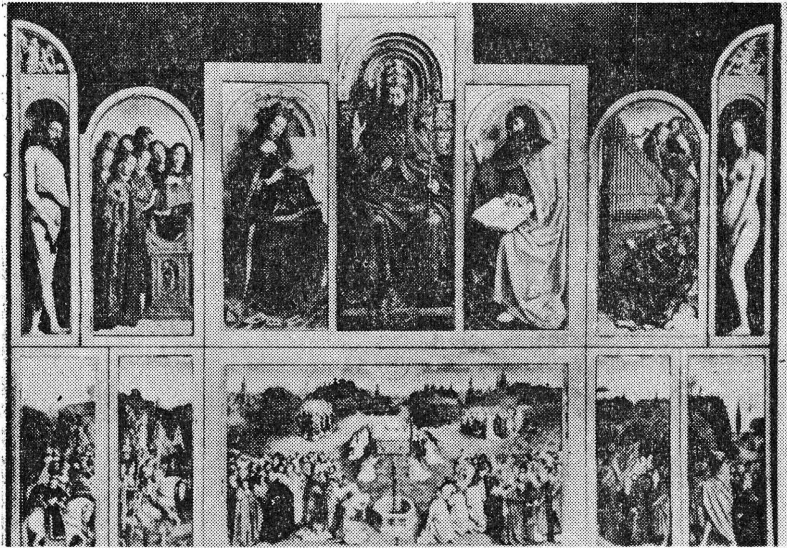
この大祭壇畫は現在ガンの Saint Bayon
にあり、内側と兩扉の外側を合せて二十枚の
板面で構成されている。その銘記によつて、
當時並ぶ者なき Hubert van Eyck が製作を

始め次に Jodocus Vyd の後援によつて Jan が一四三三年に完
成したことが知られる。内容は兩扉を開くと中央上段は主を中
心にマリアと洗禮のヨハネ、下段は小羊の禮讚、兩扉には夫々
一對をなすように上段には合唱と奏樂の天使とアダムとイブ、
その上にモノクロームで浮彫風にアベルの犠牲とアベルの殺害



第一圖

が加えられている。下段では左が騎士と裁判官（後者は一九三
四年盜難にあい現在の模寫）の騎馬群像、右が隱者と巡禮者
の行列を表わしている。扉を閉めると外側は三段に仕切られて
いて、上のアーチ型の中に夫々豫言者達をはめこみ、中段には受
胎告知、下段は洗禮及び福音のヨハネと寄進者の Jodocus Vyd



第 二 圖

と彼の妻 Isabel Borluut を描いてゐる。

二

さて、Panofsky が提出した根本的な疑問を箇條書にして示すと、

(一) 兩扉を閉じた場合、外側八面の構成を見ると三つの矛盾がある。(第一圖参照)

イ、祭壇畫内側の中央板面の頂上が各々アーチ型に描かれているが、實際にその木縁は四角である。所が扉を閉じると外側のはアーチ型に木縁を切つてしまつてゐるので重ねた場合にしつくりとしないこと。

ロ、各々の板面を圍んでいる木縁の縦の線が上下で一致しない箇所があること。

ハ、受胎告知は四面に描かれていることになつてゐるが、中央の二面はフランドル風の室内器具と窓外風景以外のものがないこと。

(二) 兩扉を開いて内側十二面の構成にも三つの矛盾がある。(第二圖参照)

イ、(一)のロと同じように、その裏にあたる所の木縁の線が一

致していないこと。

ロ、上段の主を圍むマリアと洗禮のヨハネ、合唱と奏樂の天使、アダムとイブ、下段の小羊の禮讚等五群を夫々見ると視點が不統一であること。これは例えば、アダムとイブは眞下から見上げたように描かれているが小羊の禮讚は上の方から目下して描かれている等の視點の相違を指している。

ハ、ロの空間統一の混亂よりも、もつと注意すべきことは圖像學的に見ても矛盾があることで、上段の姿體が大略等身大に近いのに下段の多數の姿體が極めて小さいと云うことは、最後の審判圖のように天上のものは大きく、地上のものは小さくと云う通例と一致しないばかりか、下段の小羊の禮讚に出てくる聖人達は小さく表わされてもよい俗人ではない。かかる故に此處では天と地との對照と云うことよりも、天上に於ける二元論を表わしているとしか受取れない。

以上(一)、(二)は祭壇畫の内外の構成や空間統一についての疑問であつたが、Panofsky は更に(三)のハに關連して圖像學的な考察のために一節をさしている。それは内側の五群を成す板面についてののみならず、夫々の關連に於ても後にこの祭壇畫の作者を決定する場合の土臺たらしめようとする比較的重要な觀察を

含んでゐる。Panofsky はこの祭壇畫の内側を一種の *Aller-heiligenbild* と看做して、(三)當時一般に採用されていた同種のものに比べると幾つかの特異性があることを指摘している。

イ、洗禮のヨハネが中央の主と同様に着飾つているばかりか、主のすぐ傍に着坐すると云う異例の特權が與えられていること。

ロ、アダムとイブが主及びその同伴者と一緒の大きさで表現され、しかも上段に上げられていること。

ハ、合唱及び奏樂の天使が彼女達だけのための板面に描かれているばかりか、天使の特徴である兩翼が全然ないと云うこと。「恐らくこれは十五世紀の北歐に於ける唯一の翼なき天使であらう」とまで云つている。

ニ、主とその兩側のマリアと洗禮のヨハネを *Augustinianism* に影響された *Allerheiligenbild* として見れば三位一體の意見を持たせることが出来る。次に直ぐその下の鳩と關連づけると主は聖靈としての性格を失うことになり、更に小羊と關連させるならば聖子としての性格をも失い結局は父なる神としての性格しか持たないことになる。難點はこの鳩であり、若し儀軌の上からも又畫面構圖上からも他の何が描かれて

いたら、上段、下段で夫々 Allerheiligenbild が描かれていたことになるであろう。その場合下段は「小羊の禮讚」ではなくて、當時としては古い形式に屬する「聖人達の祭禮」を意味することになる。Panofsky は鳩が別のもので描かれていたと信ずると云つてゐる。しかも、このような古い形式の復活はロマネスク様式に非常な興味をもつていた畫家一家には驚くに價しないことだと強調してゐるのである。

ホ、兎に角小羊の禮讚のように聖人達が一堂に會して來る場合に、兩扉の左右に表わされているものの中で隱者の群や騎士達の參列は儀軌の上からも考えられるが、兩端にある巡禮者や裁判官の參列は考えられないことである。元來はこの板面には寄進者が描かれる筈である。恐らく中央の宗教的儀式とは關係なくとも、特に参加を希望した人達があるのではなからうか。

Panofsky は以上の疑問を解決に導くために最も妥當と思われる假説を立ててゐる。

(三)の二で難點としていた鳩の位置に、元來鳩があつたのではなくて默示録に示されているような Glory があつたとする。最近の科學調査によつて現在鳩から出ている光線の下層に、

明らかに拭ぐい取られた "subjacent rays" のあつたことが確められたからである。それ故この "subjacent rays" の焦點を假想すると現在の小羊の禮讚の板面の上邊がもう二三檜上になければならなくなる。この板面は兩扉の板面と高さに於て一致していないが故に上、下にもう少し擴がるべきであろう。そうすれば縦横の比例が黄金分割になり均衡がとれる筈である。この理由として上段板面の重さにたえるために木縁を厚くしたからだと云う外に、この祭壇畫が現在置ける禮拜堂とは異つた場所、即ち Jodocus Vyd の墓のある下の擴大な crypt にあつたから、その crypt の高さに合せるために少々けずり取られたと考える。そうすれば最初の疑問(一)のイの兩扉の上のみが圓く切取られているのも crypt 内の開閉に都合よくしたものと考えることが出来るのである。(二)のイとニについて、上段中央の三大板面は元來 triptych でなく獨立の retable であつたらうとする。それは洗禮のヨハネに與えられた盛裝と特權の故で、ヨハネは又ガンの本寺の守護神でもあつたからだ。

(三)のハから見て合唱及び奏樂の天使はこの大祭壇畫とは關係なく寧ろオルガンの附屬品としての板面ではなかつたかとする

る。それは他にも翼なき天使が樂師として表わされている例があるからで、Panofsky はこれをフローレンスの本寺にあつたルカ・テラ・ロビアの Cantoria の北歐に於ける同系統のものと考えてよいと云つてゐる。

(三)のロのアダムとイブについては、内側のどの板面の繪の表現法とも一致しないが寧ろ外側のものとの共通點が多い故に、例えば人物と背景との表現法が外側下段の寄進人のそれに共通することやアダムとイブの頭上にある浮彫風のモノクロームが外側の浮彫風のものに共通するので、元來は内側のもとの關連なくあつたものを附加えたとしか思えない。

Panofsky は以上の假説に基づいて極めて積極的にこの大祭壇畫の作者をも區別しようとする。即ち以上の觀點からすればこの祭壇畫が或る一定の計畫の下に製作されたものとして受取ることが困難である。それ故始めから Hubert によつて様々の段階のままで残されていた個々の目的をもつた作品を、當時富豪で勢力のあつた Jodocus Vydt が今迄にない大祭壇を作らせるために Jan を後援して、残つていた作品を用い或は描き加えさせて完成したものと考えている。この場合現在する Jan の銘のある他の作品と比べて、ガンの大祭壇畫の外側の全部の板

面が彼の手に成ることは明らかであり、それ等と同じ表現法をもつ内側のアダムとイブも彼のものと考えられる。しからば、内側の十二面の中、アダムとイブの二面を除いたものが、一應 Hubert の手に成るものと云えるであらうか。

先ず第一に小羊の禮讚の場面に限つて見ると、場面の遠景をなす擴大風景の展望と、小羊の祭壇の圍にいる Virgin と兩端から其處へ近づいてくる群集に鋭い遠近法が見られるであろう。これに反して前景をなしている生命の泉の周圍にいる聖人達の中、特に跪坐している人物は全てプロフィールで描かれ、彫物に見られるような硬化した姿體をしているのが目立つ。

Panofsky はこの前、後景の境の邊を Dvorak の見解を参照して“transitional zone”と呼んでいる。そして後景の都市の展望や南歐の植物があることからスペインやポルトガルに旅行したことのある Jan の手に成るものとし、前景を Hubert のものとして認めようとする。更に右扉の前景をなす隠者や巡禮者の群と岩陰の二人の女性 (Magdalen と Mary) とについても同様の相違が云えることから、前景を Hubert 的なものとし、二人の女性は、Jan が背景を描き加えた時に一緒に描いたものと考えている。左扉の騎士と裁判官の群像には右扉に見るような

Hubert的なものはない。例えば右扉が真中の木縁で分けられていても差程不都合を感じないが、左扉では二面に分けられていても一枚の繪として連續的に描かれていることが馬の脚によつて見分けられる。しかも鋭い遠近法のあることからJanが手を加えただけではなく、彼が始めから構成したものに違いない。

合唱及び奏樂の天使は寶石や器具の表現法にJan的な所が認められることから、Hubertの計畫に従つて實際にはJanが仕上げたものと考えている。

最後に上段中央の三大板面も亦Hubertの製作にJanが手を加えたものと見ている。それは洗禮のヨハネに似た聖人が下段の前景に認められることにもよるが、主の足下の補石の上にある王冠の問題を解くことからである。Panofskyはこの部分の科學調査の報告を綿密に再検討して、現在ある十六世紀の補修の下にある殆ど同様の王冠をJanの手に成るものと考えている。何故なら彼がこの大祭壇畫を構成した時に、主の足下と下段の小羊の禮讚との間にある空間をうるために構圖的關連をつけようとして描き加えたとするからである。

この外HubertとJanの問題に關連して、Van Beuningen Collection の Three Marys of the Tomb や Metropolitan

Museum にも Friedsam Annunciation 及び有名な The Turin-Milan Hours についても作者を問題にしているが、ガンの大祭壇畫に於ける結果と比較しているので今此處に述べる必要もないであらう。

三

以上ガンの大祭壇畫に關するPanofskyの考察を順を追つて述べて來たが、作者決定という問題に向つて彼の綿密な考察と秩序だつた論法はこの大著の隨所に見受ける所である。しかしながら彼が周到なまでに用意した文献や科學調査のデータに壓倒されることなく自分の目を通して、實感した様式批判を寧ろ執拗に押し進めるための理論的な裏付けとして縦横に利用している態度が何と云つてもこの大著の最大の魅力である。

このガンの大祭壇畫は一九五〇年ブラツセルに於て科學調査がほどござれ、Panofskyはこれに全部目を通してはいてはなない。それ故、調査のデータに基づいてOtto Pacht (Panofsky's "Early Netherlandish Painting"—II, The Burlington Magazine, August 1956) がこの著書に對して反論を試みているが、煩雜なることを避けてこれには觸れなう。